

播磨の聖人「亀山 雲平先生」を発掘する……シリーズ 10回

第5回目

前回の、現地講座に引き続いて・・・  
**江戸官学昌平塾**

亀山雲平顕彰会代表

講師：長野 哲 先生

日時：12月21日（金）Pm 1:30～3:00

場所：白浜公民館 1F 会議室

今回の講演は、

幕府の人材育成政策による江戸官学昌平塾の設立と全国300藩への呼びかけに呼応して、姫路藩は亀山雲平先生を選んで送った。

昌平塾では佐藤一斎に師事し、教育の真髓を学んだ。

これが、後刻、姫路藩校「好古堂」や白砂清松の白浜「観海堂」における教育学者としての活躍につながる……。

お友達を誘いあわせて多数聴講してください。



[54]

白浜公民館だより [特集号]

神戸市立図書館蔵  
920年350-7  
346-4499

佐藤一齋肖像

門人渡邊舉山筆

河田烈氏藏

題

一毫似我惟我可也一毫  
不如無謂之能我可也其似  
毫不如志能也吾所知此而  
之外古神也是神也無至誠  
不古不無為川後樂高星辰  
原乃水多無為管子陽德亨  
宇宙無自无宿也游則寧而相  
者忘聲作也而况多以太  
相得能我真乎哉  
甲申長夏上時二

平生之遺墨題





東京教育博物館所蔵

聖經の釋講堂

## 二 姫路藩主酒井忠道の好學

姫路藩主酒井雅樂頭忠道は安永六年九月十日に生れ、寛政二年四月朔日に初て將軍家齊に謁し、同年九月三日に父超宗の遺領十五萬石をうけ、天保八年七月二十三日に卒去す。年六十一。奉性院殿と法證す。忠道は家督二十五年其の間學問所好古堂の改善擴張に銳意したりき。姫陽祕鑑に忠道の爲人を傳へて曰く、

奉性君御天性御學問を御好遊され殊の外御博識にて御家の御舊格等迄詳に御調べ遊され且御書蹟も甚御見事に而隸書殊に御工に被遊、御學問御書蹟には其業を職とする者共も三舍を避け奉りしこや。聖堂の諺にも文字上解し難き義有之候へば、大手の酒井へ參り承るべしと申せし程の御博識なり。されど御病氣にて早く御隠居に相成、誠に可惜可憾御事也。右之御博學故、御嘉言御確説等數多有之べきなれども、書記して傳へしものなし。不堪遺憾と古老語りき。

愛日樓全集に左の詩あり

### 題鄂王廟姫路侯詩筵次侯原韻

蘋風萬里穢中原、何日兩宮邀鳳輶、羅織終成三字獄、罔誣誰破一朝冤、久知英氣貫天日、欲仗精忠酬主恩、廟樹子今無北向、死生豈變烈夫魂、

幾年敵愾事兵戎、悲憤一生功不終、社鼠城狐謬國是、疾風勁草識臣忠、神州未復無真主、元氣猶存似乃公、有說浮雲障日恨、哀禽啼送古祠宮、

### 姫路侯誕辰侍宴

連旬風又雨、幸值霽光新、重九後佳景、三十二誕辰、酒杯空德澤、詞筆爲臣隣、更喜階前色玉樹、正面春、

而して忠道が如何に一齋を優遇したるかは、贈るに俸米を以てしたりし一事にても明なり。

### 三 江戸の儒学者

林道春が忍ヶ岡（上野公園内西郷隆盛銅像の地）の屋敷内にあつた孔子廟をうつして、元禄二年（1689）に聖堂を建てた。そしてこの聖堂に付属して、林家は儒学講義の場所を設けた。これがのちに昌平坂学問所になる。林家がこれを率いて、旗本の子弟の教育にあたり、江戸時代文教の中心となつた。

聖堂の傍の坂を孔子の生地昌平坂たちなんで、昌平坂と称し、そのちかくの神田川に架けられた橋を、昌平橋と呼んだ。

寛政年間に林述翁が昌平坂学問所を拡張した。そのころには柴野栗山・古賀精里・尾藤一洲がいて、儒学は榮えていたが、寛政元年（1789）朱子学以外を禁じた。寛政異学の禁である。こゝよりに統制されたので、儒学一般の活気はうせてしまう。

昌平坂では林大學頭が学頭で、その下に御儒者がいた。各大名中の学頭を選んで招聘した。100俵以上150俵の食禄で、御目見以上といふことになつて、100俵一人扶持という場合、一人扶持は夫婦のものにあたる食い扶持で、一人扶持が五合、二人で一升だ。がんらしい女は一人扶持三合だが、そんなことに關係なく、一升くれた。100俵の方は金に換算して、一年中の入用のときにつかうた。

この階からすると100俵ないし150俵は相当なものだ。御儒者は、自分の家来を呼んで、そのため月に1、2度または六斎といつて月に六度講義をした。この方で100人扶持をもつて、だから儒生をおいておくぐらいなんでもない。儒生のできるものには代講もさせた。

御儒者の下には教授方がおり、御儒者は朝一回講義するだけだから、ほとんど教授方が任にあつた。教授方はいらっしゃい学生に論読をさせて、質問をきいた。教授方の下には世話心得がいて、教授方の代理をした。世話心得は素読専門であつたわけだ。

学生には寄宿生と通学生とがあり、寄宿には南楼と北楼とがあった。

寄宿生となるためには試験があつた。300俵もある部屋で、正面に学頭が坐り、その裏に金屏風のうちに上壇があつて、将軍が出るときはそこに坐つた。御儒者が五、六人出て、学頭の脇に坐つた。前に見台があつて、教授方が一人出て試験をした。受験生は自分の勉強した本をもつて来て、見台の脇におき、教授方が受験生の名前を呼び、受験生はうやうやしく礼をして、見台のところまで坐つたままで振り腰で出た。教授方は受験生のもつて来た本をスッと一巻ぬき出して講義させた。寄宿生の試験になかなかむずかしかつたものだ。

寄宿には起止簿があつて、一日勉強しただけをつけておいて、六斎、たとえば一、四とか三、八のつく日に試験をしたものだ。この試験は教授方の前で講義をして、それを教授方が聞いて、たいてい負けじしないことがわかるとそれでした。

昌平坂の寄宿生はいっさい官費であつて、三度の食事も袖もただであつた。本も経書一部、歴史一部、文章一部の三部をかしてもらえた。油は月に一升で、これを行燈に入れた。寄宿の町にはなかなか悪く、朝は泥塗のもの一片、晉は何杯でもお代りができる。墨はさり干、ひしき、あらめの油揚子、菜のひたし、人參の白あえぐりであった。諸藩からくるものは寄宿寮にはいったが、これは高の秀才が選ばれて、来たから、なかなかできるものがいた。南楼の一階には御目見以下の身分の低いものがいたが、二階には御目見以上のものがいた。北楼には一般のものがいたわけだ。身分の低いものの方が割合にできたといふ。

月に三度、一日、一五日、二八日の三百に魚を食わせた。しかしそれは小さな鱈がつくだけであった。寄宿生はおのの六晩一間ずつをもうい、一側に一〇間あり、三側あった。頭取が一人いて、おののの部屋を両端にもって宿直をした。寄宿生は六尺もの屏を越して遊びにいったものだ。大小をして通すには、まず下げ諸で大力をゆわえて、下におき、下け語の邊をもって屏にのぼり、大刀をつりあげて、屏を越したという。当生京の学生は諸から来ていて、金に余裕があつたから、屏を越して吉原にくらこんでいたようだ。それと屏が六尺である。寄宿生の方には土堤や屏があつたし、七尺五寸の屏なので、なかなか越しては遊びにいけず、旗本御家人の方は金もなくて、できなかたという。

通学生も春は三月、秋は九月に試験をされた。二月と八月に丸子大祭があったからだ。孔子のまつりは朔望といつて一日と一五日に屏をあけて、菜つ葉をおした液を豆<sup>祭器の名</sup>に盛つて供えた。これは例祭だが、二月・八月の大祭は裝束をもつてするお祭りである。

三月・九月の試験には證書は弁書<sup>はんじょ</sup>ということをした。これに章意・字義・譜義があつた。旌表を主としたことはもちろんである。弁書とはもともと口で弁ずるものだが、手間もかかるので、旌表のなかから一句をとり出して、それを譜証するかのことくかかせたものだ。

旌表はその章の大意をかくこと、字義は一字一字の譜証を書き、譜義は全文の譜証であつた。三年生の三月に大試といつて卒業試験があつた。第一は弁書で、四書五經のなかから、おののおの一問ずつ問題を出した。第二は時務策で、政治問題を取りあつた。歴史や農文講義もあつた。朝は七時からはじまり各科目は一日ずつ、三日ずつの間隔をおいて行なわれた。夜は六時までであった。

試験は、甲科生、乙科生、丙科生となり、丁科生に落第하였다。

春秋の試験には褒美が出、身分のよいものには丹絵図、低いものには銀が出た。銀は財にしてあり、なかはに銀がはつてもなししたことはなかつたという。

幕末になって佐藤一斎が出てゐる。名は坦捨哉といい、美濃国岩村藩の江戸番頭で重熙の次男として生れた。藩主の三男衡が大學頭林家を継いで、林述齋となつた。そこで一斎も述齋になつたが、述齋は「二分一朱だから、三枚もら文化二年（二八〇五年）一斎は林家の塾頭となつた。天保二年（一八四二年）に林家の中守となり、林家教学のためにつくした。保守主義的ではあるが、「書志四錄」なる簡便録はよく使われ、林小舎にいる子弟で一斎の門にいたものは多い。安藤良彦・吉村秋陽・中村敬宇のこと。また源邊翠山や佐久間実山・大橋潤庵・鶴井小楠ものなどもなんだ。**『書志四錄』**は思想としては、かくべつ新しものはなし一つ見出せないにもかかわらず、篠が教育者として、その門下にあだえた感化はきわめて大であった。

#### 四 大阪の懷德堂

大阪で昌平舎にあたるものあげるならば懷德堂であらうか。がんらいはこれは直学をしておこり、町人たちの学校であった。

もっとも早く大阪で儒学をとったのは大隅掖攻島の人、如竹散人であったといふが、また一井原培<sup>いんぱい</sup>という松江出身の人物も大阪に来て講じ、門弟二〇〇人に達したといわれる。

その他大阪に住して、医薬のかたわら門弟に授けた古林見寧または北山寿安という病院があつた。門下から『異称

龜山節宇が、こゝにまた「引語所妙」と評してゐる。

「余の辭せずして記する者も亦た仰止の止むべからざるを以て也。若し夫の蒼然蔚然の美と人物の來往と、山間の朝暮、四時景同じからず、而して樂しみ窮りなき者は、則ち他日將に親しく遊びて而して目撃して、然る後に之を詳記せむ。君姑く之を待て」

文はこれを以て終る。總評として三石は、「才氣紙上に溢る、敬々服々」といひ、節宇は、「厚字掩映文を成す、自然にして委致あり」といつてゐる。

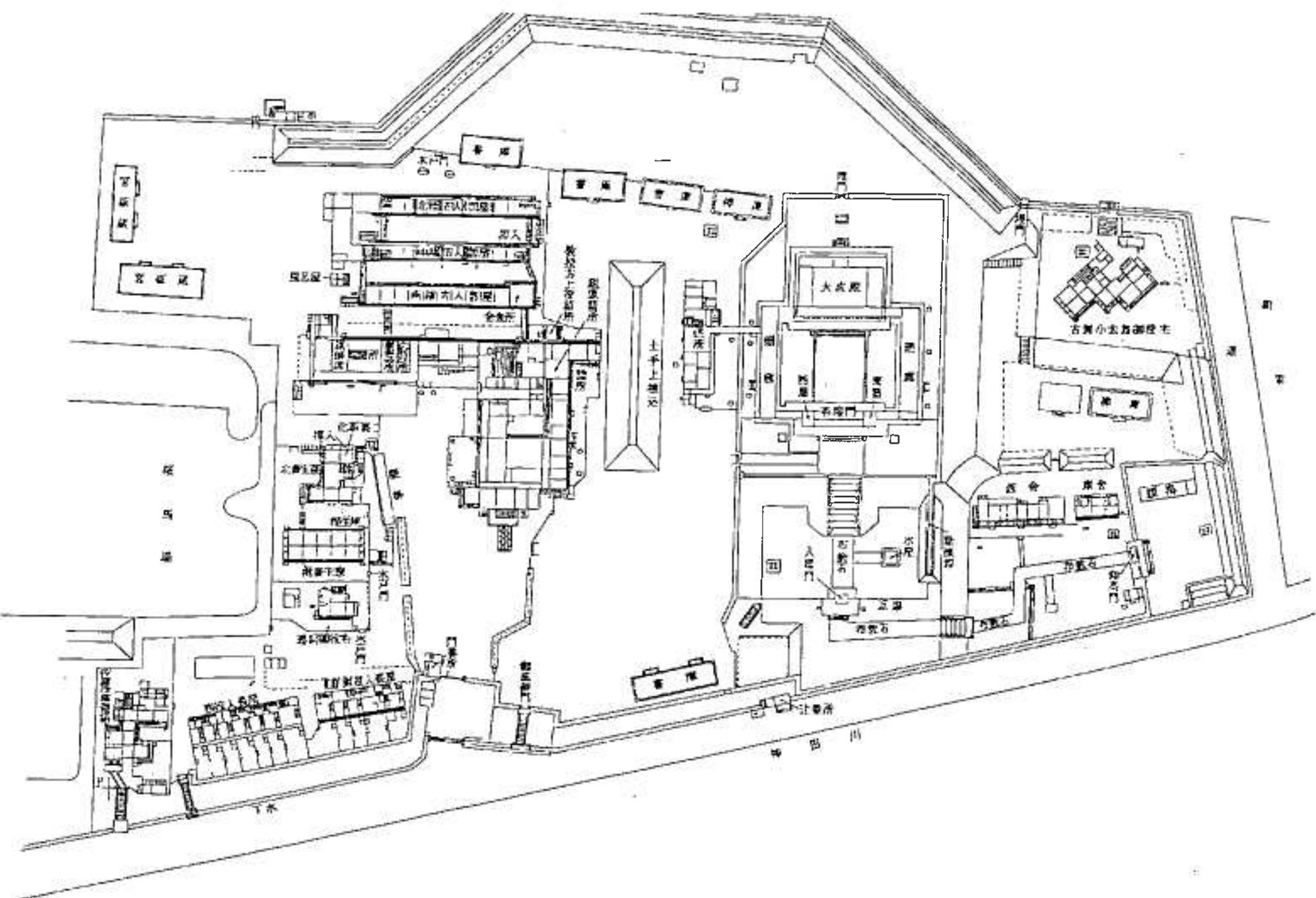
樓は全くその眺望を失つた。然も主人は依然として樂しんでゐると、いふのである。

この中の段の樓上よりの眺望を細敍してゐる様に對して、龜山節宇は、「一段の絛底、亦た細にして臨」といつてゐる。但し次にまた節宇は、「凡此より異也と至る二十三字、御愛する何如」としてゐる。それに對して金子三石は、「僕は則ち舊實に仍る」として、原文を支持してゐる。そしてまた三石は、段の最後に於て、「自若の二字、妥なりや否や」としてゐるが、これに對しても内村鶴香が、「田へ妥なり」として、三石のいふところを斥けてゐる。

以上の十九篇には、二三篇を除くの外、當時同窓の諸友の評語のあること、また後年の文の如くである。今その評者を列挙するならば次の如くである。森華遜(文)、都築漁荘(行直)、三浦雷堂(武直)、龜山節宇(和、美和)、金子三石(孝)、内村鶴香(有忍)、高橋古溪(彭)、岡鹿門(孫)、南摩羽峰(銳紀)、重野成齋(輝)、大庭學橋(橋)、高畠外(鏡)、外にまだ如直、昌の題名の評語もあるが、この二人はその人が判然しない。しかし當時の昌平寮に才俊の揃つてゐたことは、右の評者の頗觸れを見ただけでも知られるであらう。奎堂はこれらの人々の間に伍して頭角を躍んでて行つたのである。



昌平坂学問所絵図



昌平坂学問所絵図

南北三町計り  
東西六七町計り

神田明神

本郷通り

騎射馬場

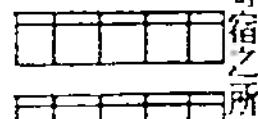
馬場

馬場

遠的場

依田源太  
左衛門様

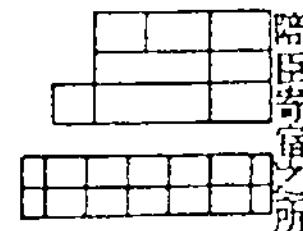
御旗本寄宿之所



御稽古所

御座敷とも御学問所とも云

陪臣寄宿之所



御玄関

御座敷

長屋

勤番

通用門

御玄関

御成門

矢場  
馬場

聖堂

大成殿

入籠門

仰高門日講之所

上番所

仰高門

御茶乃水通り

古賀小太郎様  
御役宅

学寮

此近處々御書物藏有之

第九二図 聖堂之圖 (多湖安元“聖堂向大略之覺”所収)

7) 日本教育史資料 卷十九 教則 (第7分冊 108~110頁)

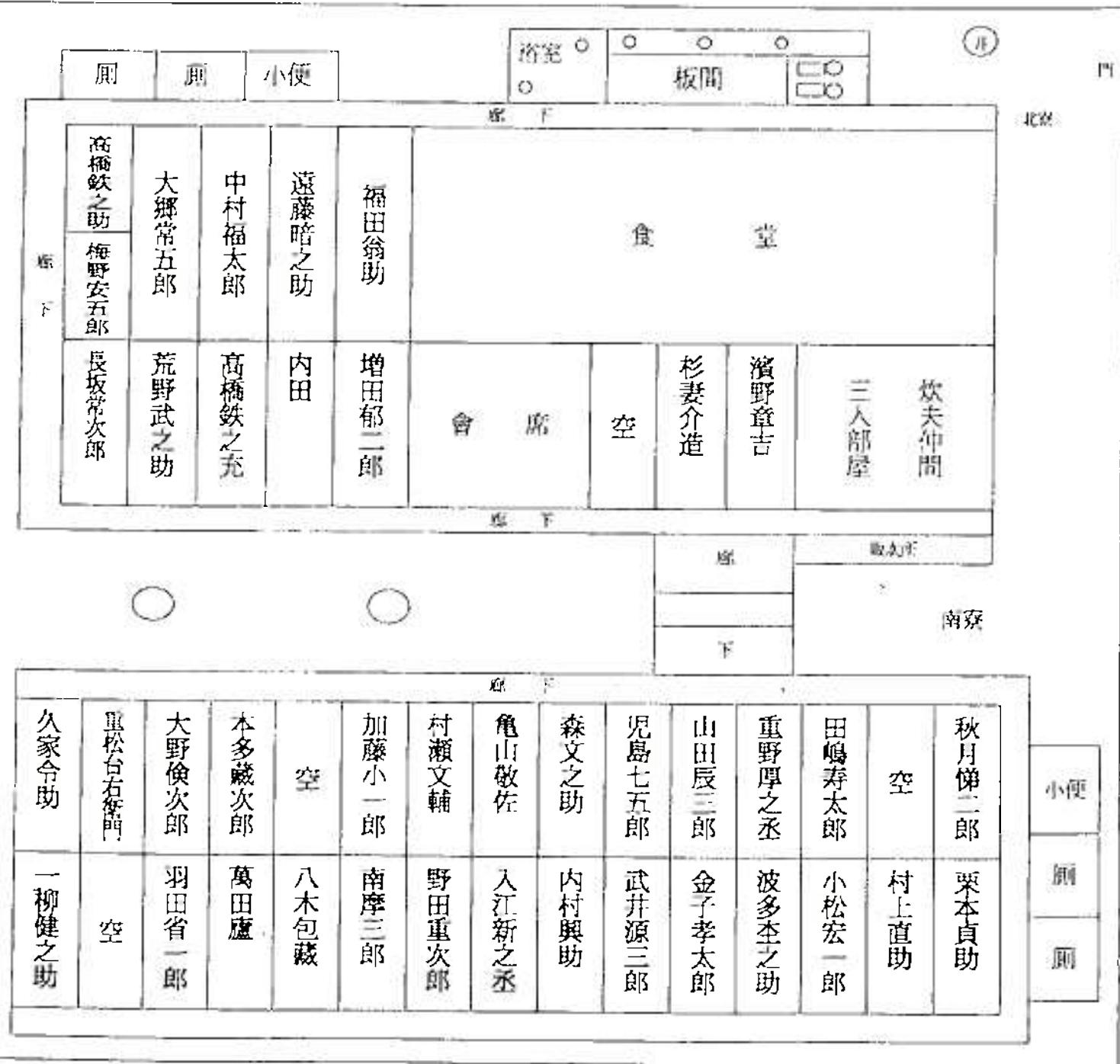
8) 同書 卷二十一 古記錄 (第7分冊 952~964頁)

嘉永四年五月現在の書生寮の図

聖堂書生寮之圖

南察八置北察六置  
尤會堂ノ東察八置也

四十四人ヲ以満察ト定ム  
今四十人入察ノ書生有



第三七表　嘉永四年五月現在の書生寮在留者氏名

批評諸家輯錄

不滿年次先見

批評諸家例以號稱之號不詳則以字稱之字亦不  
明則始稱名而其人多係節字先生江戶昌平氏  
空諸友

高 雨舟

名致敬字子江

菅野白華

名安直字白華

重野成齋

名安直字成齋

高橋飯山

名代宗會字飯山又太陽且稱三哥

原仲寧

名任字仲寧本門人也

上田貞

名成美字貞見馬人

水本樹堂

名厚直字樹堂見馬人

三浦雷堂

名厚直字雷堂見馬人

都築漁齋

名厚直字都築漁齋見馬人

安積良齋

名厚直字良齋見馬人

生形虛堂

名厚直字虛堂見馬人

南摩羽峯

名厚直字羽峯見馬人

森深谷

名厚直字深谷見馬人

相良鷗里

名厚直字鷗里見馬人

土屋鳳洲

名厚直字鳳洲見馬人

八木東原

名厚直字東原見馬人

小松元伯

名厚直字元伯見馬人

宮崎誠

名厚直字誠見馬人

金子三石

名厚直字三石見馬人

多田菊屏

名厚直字菊屏見馬人

木原源里

名厚直字源里見馬人

續古堂

名厚直字古堂見馬人

岡崎億山

名厚直字億山見馬人

津田筑浦

名厚直字筑浦見馬人

木原老谷

名厚直字老谷見馬人

長梅外

名厚直字梅外見馬人

士屋清脩

名厚直字清脩見馬人

大鄉學橋

名厚直字學橋見馬人

加藤守禮

名厚直字守禮見馬人

內村松江

名厚直字松江見馬人

葛西確齋

名厚直字確齋見馬人

秋月子錫

名厚直字子錫見馬人

栗本鋤雲

名厚直字鋤雲見馬人

堤靜齋

名厚直字靜齋見馬人

三島中洲

名厚直字中洲見馬人

江戸の巷

書夷堂禪師書後

龜山雲平文

禪師曾子吉藩田封既橘龍海院住持なり。  
禪學一味物ト較也哉、而シテ其自ラ持スル  
甚リ嚴ナリ。

僧徒伏所夕法務令也ズシテ行ハル。足ヲ以  
テ掛錫多年而シテ、公望ヲ看護ス。復シ脅火  
缺乏、患丁半也。師一書墨痕淋漓温ニシテ、  
勤便真人ト爲リ如シ。蓑漠ニテ、壁ニ掛け

晨夕灯坐以テ惜淡虛冲、氣ヲ養フ。真ニ極ア

ルナリ。

余亦江戸ニ在リ、師、弊若經ヲ講スルヲ聽  
ク、某、傳ニシテ、而シテ、識アルヲ敵スル  
也。

江戸の巻

書太田道灌乞蓑

龜山雲平丈

圓後

余曾千紅戸ニ遊ニ、山吹里ヲ過ゲ、因テ  
上杉定正、尋太田道灌、事ヲ恩フ、今此園ヲ  
觀ル、益々感アリ、道灌鷹ヲ比翼ニ放キ、雨  
ニ值ヒ民衆ニ就キ蓑ヲ乞フ、一少婦山吹花一  
枝ヲ折テ之ニ視ス、山吹花者棟蓑花也、古歌  
ニ其裏ナヤコトヲ言フ、東ナキハ邦訓蓑ナシ

ト言フニ近シ、而シテ道灌悟ラズ、後大ニ感  
激シテ、心ヲ歌道ニ習シテ、而シテ、朝一盈  
縮ラモ知ルニ至ル。書云ク若葉不眠眩歎痒不全  
瘳然ラベ、一樣蓑花ハ乃干道灌對症、剃剗也。

江戸の巻

象岳寺拜赤穂義士

墓 記

龜山雲平文

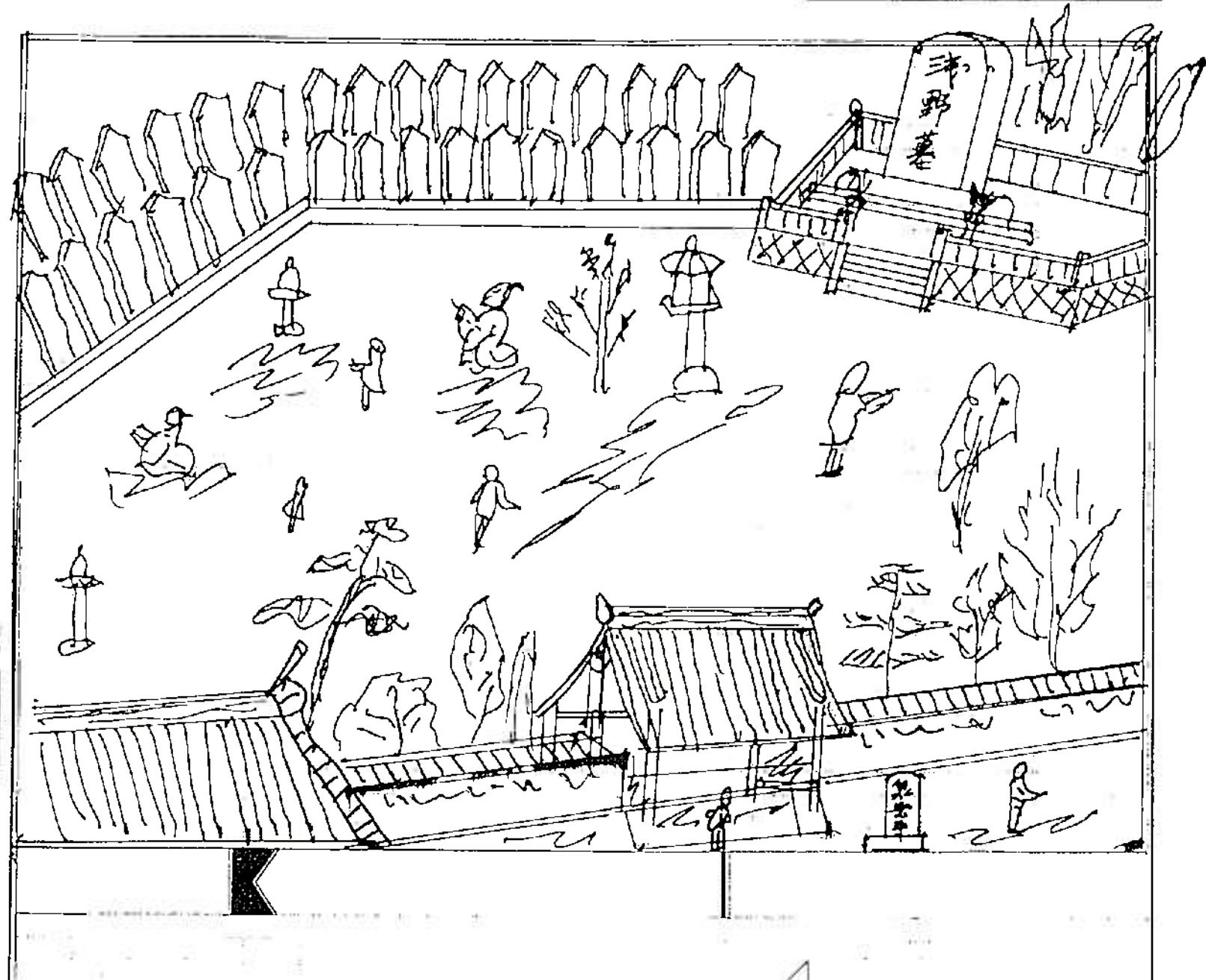
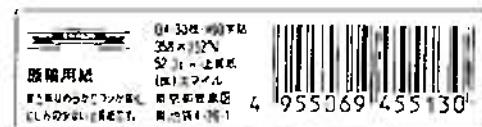
余ハ江戸ニ遊バ也、一日校友數人ト高輪泉  
岳寺ニ詣リ、塔ニ赤穂義士ノ墓ヲ拜セリ。  
当時ニ在テハ、寺甚グ壯麗ナラズ、門内一  
庵アリ、四十丈士ノ木像ヲ安ズ。然レ失粉飾  
已ニ剥落シ、旦ツ整頓未ダ至ラズ、觀ルニ星々

ル者ナシ、又左折一小邱アリ、而シテ其石階  
ヲ踏レバ、其ノ平坦方ニ三丈首ニ浅野侯長  
短1塙アリ、塙次ニ其位ヲ占メ四十六士ノ墳  
アリ、每墳石面謚号及字劍字ヲ用フ、又一墳  
アリ、諸子曰ク此レ薩摩義烈人也ト。

余未だ莫詳ヲ悉サズ、彼ニ其ノ善剣氏丁ル  
コトヲ知ル也、善剣氏大石良雄ニ坡樓ニ蓬ニ  
英ノ復仇。志ナキヲ罵リ、大ニ侮辱ヲ極ム  
良雄毫毛聲色ニ見ハサズ、善剣氏後ニ其復仇  
ノ有ナタルヲ聞キ、嘆歎過ナ悔心、終ニ墓

(3)

繪圖 雲平画.



# 鐵砲洲警衛之図

日本の夜明けを見る——コマ

香山 宏

城は各地に残された多くの鉄筋コンクリート造りの天守は博物館として、城主の直品を中心にしてその場のすぐれた史料が展示されている。ところが、塔跡はに登ってみると展示品が少ないとよく耳にする。塔跡は城主が次を入れ替わり、その上、明治初年には陸軍の駐屯により、武官屋敷のはとんどが拆除され、さらに、昭和二十年の空襲で外曲輪に残っていた武家屋敷も消失した。そのため史元には古史料がほとんど残っていない。だから、因縁を残してある近島城天守は、展示物よりも天柱、梁、木造などの手はらしき、漆さを見るところであろう。

寛延二年（一七四九）から明治に至るまで百二十年の間、塔跡城主であった酒井氏の子孫が、昭和四十年頃塔跡市に膨大な史料を貯められ、その中で展示に適するもの百数十点を塔跡城で所蔵することになった。現在、その一起を天守の一階と一緒に展示している。

塔跡城下の諸國や藩代城主の住印をはじめ、盛王の画像、書画、刀剣などである。その中には、「年始拜礼圖」と呼ばれている酒井忠以（宗推）から松江の忠平（治邦）不昧等に送った年始の挨拶状（朱書き通牒）が書き込まれている。や、酒井忠平、酒井忠一質の「鳥の図」など文人としての城主を見るものができるものが多く所蔵されている。

「鐵砲洲警衛之図」は、嘉永七年のペリー西洋船に際し、城主酒井忠頼が西兵を率いて警備に向かう行列を、お隣の塔跡村野水秀に描かせたものである。まず、番頭の舟には「甲秀（嘉永水七年）春臺慶利加草船警備入番賀港……嘉永七年仲冬藏田頼重」とあり、城主みずから序文を書いている。巻本には、この絵の説明が書かれており、「嘉永七年甲秀十一月番良集計長舟（平）執事」とあるので、出陣した年の十一月にこの絵巻が完成している。

二卷に及ぶ絵巻は、十六種、機銃、礮弾、礮丸、目付、銃弾、炮弾などが板画、大砲や舟もち、米俵の運搬などをしていわいに描かれている。馬に乗った大砲兵将には、その槍がかづぐ員足箱に氏名が、また徒士にもそれを頭に氏名が記されており、各人の衣服には、それそれぞれの家紋がでかくと描かれている。また、「成兵換装圖」として炊飯の様子も詳しく描かれている。これにも、「數百の精士のために、駿河二里、大糸をかけ……」と東山五郎のつづりから説明が付いている。この大絵巻は、美しい彩色で、生き生きとその行列の一人ひとりの姿を描き、行列の様子をつねさに伝えている食卓を史料である。

なお、この二巻の絵巻が収められた相模に藤井の「御書付」には、「嘉永二年（一八五五）三月五日」の名前で、藤井忠良の「鐵砲洲丸において上機（塔跡村野水）にし、内々に御覽いたいた。」とある。これに取扱う事（手渡し）と記されている。この絵巻は、今までに東洋人米萬石娘、市立美術館等で、兵庫県立博物館などで開催の開港前夜の企画特別展には、贈られて出席したことがある。鐵砲洲所蔵の中でも珍りは見つかるものもある史料である。

紅戸の差

行軍圖卷跋

龜山雲平丈

文政元年  
右行軍圖巻今茲甲寅春正月西美加兵

謂いへるシヲベテ、船主ミヤカハシトヨコトニコトニラムセイガツアソガ理  
 トヲナシ御者テ存此ノンテ、右行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 物カベ危ス之に間ノ役キ。テ、行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 レンレ士ラスメ、島貿易ノ事也。行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 、ズ木國ツ、公ヲ、島貿易ノ事也。行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 後半以降、國ツ、公ヲ、島貿易ノ事也。行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 ノテ云シ畢不即テ、某レハ大將已下若干兵ヲ出シ、  
 此相呑下コトニ至ルニ在ア、行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 國ツ、此ノ事也。行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 ヲ勵行圖チ及々、某レハ大將已下若干兵ヲ出シ、  
 観ミスニ永ナテ、行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 者モレ入イク、屢々ハル忘ス画、行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 、ハル忘ス画、行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 某ノ則チ君モレエヨリ使を、某レハ大將已下若干兵ヲ出シ、  
 レ十、サル、野ハ、行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 玩ノ君ノホタル、野ハ、行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 物ガ、臣ニ其ソラ、野ハ、行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 視ニ兩吉敵大軍敵、永ニシ、行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵  
 ス得ト、ノ、行軍圖巻三巻今茲甲寅春正月西美加兵

嘉永六年六月（一八五三）亞米利加艦隊ペリー來航に對し  
姫路藩兵、浦賀へ出陣した時の士卒の氏名

○○

服坪横大山大市立大小宮志吉佐狩中大堀杉峯大樋瀧奥春須梅牧粟森神鈴小丸  
部内山平岸谷川川島糸沢賀村久野村河江山村塚口澤山山田澤野飯田谷木林島  
惧甚大左 閨金官 岩間鐘 原 捨宗 万鉄欽 七錠原浪 半 丑  
豊次一三衛權七之七官武源次 吉 三熊波應惣次三岩五四次啓 五之平 右銀三羊三  
次郎郎郎門次郎助郎助助次郎 五 郎藏助次郎郎藏郎郎藏 三助助助 次郎郎郎  
郎

○

龜秋植芳宇坂神宮重山山海井有三田中堀松諸小小武手岡堤角牛荒北小渡水高  
井元松賀野井戸澤田脇川老上馬浦中嶋口本葛野暮藤島本 田込木爪林部野橋  
出 平左 久 造 莊 惣大鑑沢弘又 三三剣次次乙平元金寛孝格 望皇又弥  
席源一 右 酒 右鹿太兵 左 次之 牧 之三多之左 一郎郎一之之右 四之八弥友太五五七仲  
者吉郎郎衛衛平夫蔵門助之進郎膳助衛郎助助郎進助衛郎助郎作弥郎郎郎郎藏  
門

一  
二 烏岡上大荒清伊松大本永木渡勅勅本今伊前矢小中吉小安伊岡多金金秋細  
人山崎田山木水藤田米澤原河庄根村部使河原使多村舟島内泉里澤幡井藤田賀井澤間野  
四 鉄郎左亥 三 安鑄原 亀傳久 河巳 城 惣念市 九釣安節貫貫五 五  
之右太十貢九 左 一右衛郎安三次乃兵 万兵辰源次太三左衛門 久賀五右衛門之八次半太  
（二〇天）丞衛夫郎 郎衛門 次弥郎承衛 次次郎 一助郎郎助郎郎助夫衛

右行軍校國公之書  
春三月里士虞文役吾師  
其降奉

幕吉戌仰瞻天子之國也  
行止有法旗鼓整肅某為士  
大將某為將候某為俠士某  
為日什以至捨士疏卒細大  
不遺原一可觀矣此役也

公在師憂思不措教遣俠士  
尚思咸革至而士皆集焉用  
無復生還之意既上終役

公情不勝榮矣遂登檣歸水  
堯國之勝游於此則成過三  
軍極殊其樂莫窮而苟上此  
國者才智不盡當失石敵  
王愾忘則可謂學君臣內得  
矣其友國家益多革衣戎戈  
亦已歲深草棘四五藩又有  
家窰室廩空諸役則亦可以  
絕此國者誠難然徒供災  
艱以義為務不惟人之其則固  
不若無作也嗚乎後之艱者  
其勿敢物覩之

嘉祐七年甲寅冬十月下薛

臣參軍山東本領首撰



題成兵給糧營圖後

國寶齋

鐵砲洲之役其浦軍卒為賄奉行兼領  
作營幸賄奉行者給糧食之職也軍卒  
有吏幹坐而顧使徒卒如隸使指飲殲  
立辨數百將士皆得以時飽也營設二門  
自左門入自右門出積未若干石量口而  
炊三竈三坐架以大釜而以竹籠盛未  
并篋而不釜中湯漿而燉無範為方  
餅三幾箇歟幾斤錢營諸營而其後復  
失給驗以防盜竊報告若以琴棋為號  
以至汲水吹火瑣事六皆有法度及軍  
器軍卒自作圖以傳家歟俾兒孫追  
思父祖之勤勞然而謬辱

公之一囑

公遂使持野永秀依樣寫之先是

公已命永秀作行軍圖三卷魏序之及  
此圖成又副之其後以供覽觀則

公之能容物如海而軍卒之榮亦大矣豈

唐侯兒孫追思之哉

坡政紀元甲寅冬十月念二日

臣龜山姜知府 教撰

## 行軍横図（鉄砲洲警衛絵巻）

Picture Showing a March Painted by Eishū KANO

1854(嘉永7)年

狩野 永秀 筆

嘉永6年、浦賀沖（神奈川県横須賀市）にペリー艦隊が来航しました。幕府は諸藩に、江戸湾沿岸の防備を命じました。坂路藩は、鉄砲洞と佃島（東京都中央区）で警備にあたりました。

この図は、警備に当たる酒井家の隊列を描いたもので、携行した武器や兵営での炊事風景も描かれています。

In 1853 the fleet led by Admiral PERRY from the United States came to Uraga (in Kanagawa Prefecture). This picture shows a march of warriors preparing for the defense.



15



17



↑ 桃井重政  
↑ 桃井重成  
↑ 桃井重義  
↑ 桃井重定  
↑ 桃井重義

↑ 今村辰次  
↑ 今村辰次

↑ 大内家  
↑ 大内家

↑ 木曾貞一郎  
↑ 木曾貞一郎

↑ 度部盛輝  
↑ 度部盛輝

18



↑ 穂山高一郎  
↑ 穂山高一郎

20



↑ 藤原三郎  
↑ 藤原三郎

↑ 三川不吉  
↑ 三川不吉

↑ 利田可喜  
↑ 利田可喜



卷之三

卷之三

个眼都變青是

卷之二

卷之二

卷之三



卷之三

卷之六

卷之三



卷之三

100

卷之三

卷之二

卷之三



卷之三

四百

卷之三

卷之三





